

エペソ人への手紙 第3章 14～21節（抜粋）

「こういうわけで、私はひざをかがめて、・・・どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことの出来る方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。」

私たちの信仰の先人からのことばです。ここに全ての聖句をあげませんのでご自身でたどってください。囚われの身でありながらエペソの仲間たち、教会への手紙です。誰にも、皇帝にさえ、ひざをかがめることを決してしなかった書き手が、主なる神の御前でひざをかがめます。獄中で表わされる手紙の書き手の姿です。今日、明日のいのちの行方が自分の手の中にはありません。皇帝の一存にあります。生殺与奪の権を持つ者の脅しがあります。

そこでさえ、手紙の書き手は礼拝姿勢を崩すことはありません。四面楚歌での礼拝です。孤立状態での礼拝です。しかし、祈り始めるのです。主なる神に語ります。そして、エペソの教会のためにキリストの存在を祈ります。さらに、私たち、と祈り、エペソの教会と手紙の送り手が一つとなります。私たちに働く力を、御霊の働きを共有、共感しています。時と空間を超え礼拝する教会共同体が、声を合わせ、声を揃え信仰告白します。アーメン。